
 学 会 記 事

第46回新潟消化器病研究会

日 時 昭和62年7月18日(土)
午後1時30分より
会 場 新潟厚生年金会館

一 般 演 題

1) 食道裂孔ヘルニア合併食道潰瘍に対する aluminum hydroxide gel, magnesium hydroxide (Maalox®) の少量・頻回・長期投与例の検討

小林 英司・本間正一郎 (新潟県立六日町病院外科)

食道裂孔ヘルニアは、胃の一部がヘルニア内容となり食道裂孔を通り胸腔内へ脱出するため下部食道括約部機能不全を生じ、胃液逆流による食道炎・食道潰瘍を併発しやすい。諸施設で外科的治療法の検討が加えられているが、高齢者に好発するため保存的治療も望まれることも多い。食道裂孔ヘルニア特に滑脱型ヘルニアに食道潰瘍を合併した11症例に aluminum hydroxide gel, magnesium hydroxide (Maalox®) を長期投与した。同剤の潰瘍部付着作用に注目し、少量(一口)頻回投与を行い、投与のための携帯用薬びんに工夫を加えた。全例に自覚症状の改善を認めたが、内視鏡改善率は45%であった。内視鏡改善の認められない症例につき、H₂ 受容体拮抗剤または抗コリン剤を投与したが有意の差は認められなかった。同剤の長期投与による血液生化学的異常及び便秘や下痢等の消化器症状の副作用は認められなかった。

2) 内視鏡下点墨法による胃潰瘍の治癒機転に関する検討

秋山 修宏・成澤林太郎
植木 淳一・阿部 実 (新潟大学)
富樫 満・上村 朝輝 (第三内科)
市田 文弘
山口 正康 (同 第一病理)

A₁~H₁ stage の胃潰瘍症例9例に対し、潰瘍治療前に潰瘍辺縁の胃粘膜に4ヶ所点墨を施し、それぞれ対側の点墨間距離と潰瘍の大きさを内視鏡下にメジャーを用いて測定した。同時に超音波内視鏡(以下 EUS)により再発所見の有無を確認した。同様に治療後の S₁

stage の状態における点墨間距離を測定し、治療前後で両者を比較検討した。点墨間距離が治療前後でほとんど変化の見られないものは6例であり、6例中4例が EUS にて再発潰瘍と診断できた。点墨間距離の短縮が見られたものは3例であり、3例中2例が EUS にて再発潰瘍と診断できた。胃潰瘍の治癒には胃壁の収縮がほとんど関与せず、上皮の再生が主たる治癒機転であるものが存在する事が示唆された。

3) 腰痛を主訴とした胃癌の1例

中沢 俊郎・樋口 渉 (信楽園病院内科)
塚田 芳久・村山 久夫

症例は37才男性、昭和62年2月腰痛を主訴とし整形外科を受診するも異常を指摘されず、5月になり他院にて血清 ALP の上昇を認め精査目的にて当院入院となった。入院時、血清 ALP の著明な上昇と骨シンチにて骨盤、胸腰椎にびまん性の著しい集積を認め、転移性骨腫瘍の存在を疑った。消化器症状を認めなかったが、原発巣検索の目的で施行した胃カメラにて体部小彎に IIc 類似進行癌の所見を認め、骨転移を伴う進行胃癌と診断した。初期 UFT, レンチナンを投与するも、1ヶ月後、血清 ALP の急上昇を認め ADR, MMC を追加投与したが、びまん性肺転移によると思われる呼吸不全にて死亡している。剖検でも、胃体部 IIc 類似進行癌で膈への直接浸潤を認めた。胃癌の骨転後は比較的少なく、消化器症状を欠如したため診断の遅れた1例であった。

4) 胃病変を有するサルコイドーシスに胃悪性リンパ腫を合併した1例

岡田 和彦・味方 正俊 (立川総合病院)
渡辺 裕・大貫 啓三 (内科)
大溪 秀夫・酒井 靖夫 (同 外科)
北島久視子
富樫 満 (新潟大学)
福田 剛明 (第三内科)
渡辺 英伸 (同 第二病理)
(同 第一病理)

症例は23才男性、昭和59年11月胸部X線で両側肺野のびまん性粒状陰影および BHL を指摘され来院。リンパ節および胃粘膜生検でサルコイド結節が証明された。プレドニン療法を試みたが昭和61年3月以降は来院せず。昭和62年1月意識消失発作あり来院。頭部 CT, MRI では神経系の器質的疾患は否定された。この際に胃内視鏡施行し、前庭部に多発性潰瘍性病変がみられ、生検で悪性リンパ腫と診断された。

以上胃病変を有するサルコイドーシスに胃悪性リンパ